やさしい日本語の試み

柴田　実

1. やさしい日本語とは何か

日本語は難しいことばだと言われることがあるが，それは表記についてであり，会話文の日本語はさほど難しい部類には入らないとする考えもある。

たとえば，留学生の場合を見ると，母国で日本語をある程度学習して来日しても，日常生活程度の会話はできても，「ニュースを理解するのは難しい」「回覧板などの広報文書がわかりにくい」「外来語がわからない」「漢字圏の出身であるが日本で使われている熟語と意味が違ってとまどう」などの意見を聞くことができる。

特に専門用語については共通して「理解しにくい」と述べている。

日本に多い地震災害や，水害などの緊急時にこれら留学生をはじめとする外国人の救援を目的に，「やさしい日本語」の研究が，弘前大学人文学部佐藤和之教授を中心に文部科学省の科学研究費補助金を受けて進められている[1)]。

「災害時に，日本語能力がそう高くない人でも，日本語話者の努力と協力で一人でも多くの外国人を救おう」というのがその発想の根底にあった。

具体的には日本語能力検定試験3，4級程度の日本語理解力でもわかりやすい表現はできないかということである。

ここで言う「やさしい日本語」は20年以上前に元国立国語研究所長，野本菊雄氏が提唱された文法的な簡約を理論的に推し進めた「簡約日本語」とは異なり，実際に使える，誰でもが実行できるものを目指している。

具体的には，語彙（ごい）の制限，文の長さの制限，修飾を軽減する，話す速度を下げて意味によることばのかたまりを作ることなどである。実際の運用では言語以外の図やシンボルについても検討の対象を広げている。

外国人に対して，現在日本人社会で流通している情報すべてを「やさしい日本語」で伝えようということではなく，災害の初期に身を守ったり，幅広い救助が行われるまでの期間に役立てればという発想がある。

佐藤が制作した『新版・災害が起こったときに外国人を助けるためのマニュアル』（2004）によれば，「使い手は，外国人に地震に関する情報を的確に伝えようとする人たちです。具体的には市町村役場の担当者や消防，ボランティア団体，マスコミ，町内会の世話役といった皆さんを想定しています」「災害発生時から72時間以内に必要となる情報の表現を時間軸に沿って用意しています」と記述され，理論的な組み立てをきちんと構築して提供された言語ではなく，運用しながらカットアンドトライを試みる，あるいは情報発信者が試行錯誤しながらでもすぐに使える

ものを目指していると言えよう。

また，「災害発生時から72時間以内」に限定しているのは，外国語が母国語の話者にとってはやはり母国語による情報提供が望ましく，精神的な支援にもつながるのであるが，大規模災害の場合や被災地が中山間地あるいは外国語話者が少ない地域では言語支援の態勢が整うまでに3日程度かかると想定しているからである。

ここでおおまかに「やさしい日本語」が提起している注意事項をあげ，その特長を見てみよう。

①1文を短くして文の構造を簡単にする。

②災害時に使われる難しいことばで外国人が知っていたほうがよいと思われることばはそのまま使い，そのことばの後に＜＞を使って言いかえを付ける。

③外来語は外国人にとって誤解されるおそれがあるので気をつけて使う。

④動詞の語幹部分を名詞化したことばはわかりにくいのでできるだけ動詞文にする。

⑤否定の表現を使う場合でも二重否定文は使わない。

⑥助詞はなるべくわかりやすいものを使う。

⑦あいまいな表現は避ける。

⑧漢字表現は漢字圏の人には伝わりやすいが，非漢字圏話者には不利になるので使用量に注意する。また，漢字にはルビ（ふりがな）を付ける。

以下一項目ずつ説明する。

①「1文を短く」は，具体的には「○○は△△だ」というような文を想定しており，「○○は□□だから△△だ」のような内容は2文に分けるということを考えている。

NHKの放送用語委員会でもたびたび指摘されている，「複文構造より2文の単文を」ということと共通している。

運用にあたっては，情報の内容を複数の単文で構成される1つの文章でまとめるようにしないと情報受容者が混乱することに留意する必要がある。

文章の作成にあたっては単純な文の列記になるので，文の順番を十分考慮することや，主語の交代を明確にするような注意が必要である。

②語彙については次のパラグラフで詳述する。

③外来語は，原語の発音とはかけ離れた単語や，意味の一部だけを借用しているものがあるために難しい単語になってしまう。しかし，これらの単語を言いかえようとするとどのようにすればいいのかわからなくなるという悩みを聞くことが多い。それだけ日本語化した外来語が日常で多く使われていることになる。自治体などの役所ことばにも多く見られ，行政関係者自身が悩んでいることの一つでもある。

④情報を伝えるための最近の日本語では主語と述語を明確にしたいという意志もあり，抽象的な事柄も名詞構文にする例が多く見られる。「揺れがある」「勧告を行った」「新規店の開店が悪循環を生じた」など「揺れた」「勧告した」「新規に店を開くことで悪循環に陥った」などとすればよいわけである。特に外国人には抽象的動作の名詞が主語になる文はわかりにくいようである（例：「安全の確保が重要になる」など）。

⑤「通れないことはない」「持っていないと受け付けできない」などの二重否定はわかりにくく，さらに言えば，否定文より肯定文のほうがわかりやすいと言える。

⑥助詞だけに文の意味の多くを担わせる構文はわかりにくく，同じような意味を持

つ助詞も混在させないほうがわかりやすいと言える。方向を示す「へ」「に」，主語を表す「が」「は」などはどちらも同じような働きだが，なるべく同じものを使ったほうが混乱がない。また，方向や始点を示す「から」を「～」という記号で時間などを表すことがあるが，これも非常にわかりにくい。

⑦「おそらく・たぶん・かもしれない」などの表現はあいまいで理解されにくく，多くの場合受け手の中で断定か否定かに変化してしまうおそれがある。

⑧漢字は，非漢字圏話者にとっては苦痛になっているようで，熟語を構成する１つ１つの漢字の意味を推測して未知の熟語を判断することは難しいようである。一方，漢字圏話者にとっては，日本で使われている意味と中国語の意味が違い，とまどうこともあるが，おおむね理解はできているようである。

また，漢字にはふりがなを振ることで，文字として知らなくとも，音として理解している単語について理解が進むことになる。

これらの特色を持った「やさしい日本語」は外国人ばかりでなく，災害時に心身にショックを受けた日本人にとっても「やさしい」し，子どもにもわかりやすいと言える。

2. 語彙

「やさしい日本語」が用いる語彙数は約2,000である。これは外国人のための日本語能力試験の３級程度，小学生の低学年程度で理解できる単語のレベルである。

そのために，「消防車」は「火を消す車」，「避難」は「逃げる」などと置き換える必要があるが，通常の語彙を持っている日本人には回りくどく不評である。

また，このようにやさしい語彙を使用していると「緊迫感に欠ける」「重要な告知とは思えない」などの反応が出ている。日本語母語話者にとって，「わかりやすさ」と「緊張感」は相反する感覚なのかもしれない。

これらの，単語については，日本語母語者にも受け入れてもらえる程度の単語はどのようなものかの検討が必要になる。

実際に「やさしい日本語」を災害時に運用しようとすると，災害原因である地震，津波，洪水などの専門用語や，安全な場所への避難，避難所での指示，生活必要物資の入手などさまざまな場面で使われる「災害用語」は約2,000のことばには含まれていない。

「避難，救助，火の元，確認」など最低限のことばは，「やさしい日本語」に含めておいたほうがよいと思われる。しかし，2,000語程度の日本語語彙しか知らない人にとって過大な要求はできず，何が基礎的に必要な「災害用語」であるか，最大でも20から40語程度に限定するためにどのように考えるかは今後の大きな課題であり，それらのことばを外国人向けの基礎的な日本語教育に含めることも努力目標の１つである。

これが可能になると，日本語母語者にとっての違和感も軽減できることになる。

3. 情報内容

災害時にはさまざまな情報が交錯するが，日本語能力がそれほど高くない人にとっては抽象的な語彙とともに，抽象的な指示内容はわかりにくいことが確かめられている。

「火の元を確認する」より「ガスの火を消して」のほうがわかるし，「頭部を保護する（頭を守ってください）」より「帽子やヘルメットをかぶってください」が直接行動に結びつきやすい。

これは，理解しにくい日本語を聞いて，頭の中でそれを翻訳し，それから母語的な思考を行い意志を決定し，それに基づいて行動するという複雑な過程を経るよりも，頭の中で翻訳すればすぐに行動に移せる文章構成のほうが有効である。

この特長は，やさしい日本語の副次的な効果の１つである「翻訳の容易さ」「指示の明確化」にもつながる大きな長所である。

情報内容の整理は，通常の日本語でも必要なことであり，「やさしい日本語」にのみ要求されるものではない。ただ，「やさしい日本語」には「やさしくするための制約」があるために必要条件となる。

情報提供者の最低限のマナーとも言える提供する情報の整理についてはさらに別の検討が必要になるが，当面「やさしい日本語」が目指している発災から72時間程度の情報では，複雑な情報構成は必要ないので，市町村広報担当者レベルの日常の研修で対応できると思われる。

4. 文章構成

緊急時の情報は，いくつかの要素でくくることができる。

まず大切なのは必須情報である。

次に，選択情報，安心情報，利得情報の順で考えられる。

必須情報としては

- 災害の原因を伝える情報
- 受信者がどのような行動を取るべきかの直接的な指針

選択情報というのは，受信者が情報を選択して自分に関係のあるものだけを利用できる情報のことである。

- 出身国別の対応
- 地域別の対応
- 資格や条件による対応

安心情報というのは，あわてふためいた状況を落ち着かせ，周囲の状況を的確に伝えるなどの観測に基づく情報のことである。

利得情報は，その情報に接した人が便宜を受けたり，情報を持っていない人に比べればなにがしかの利得があったりする情報である。

これらの情報を，混在させずに伝えることが必要であり，そのために区分けのコメントや，表示する場合には掲示物の種別がわかりやすいようにくふうする必要がある。

また，情報の種類ごとに音声による伝え方を変えるかどうかはまだ検討されてないが，親類，知人の安否情報や，周辺地域の客観情報などは伝え方にくふうが必要であろう。

日本語の理解度が低い人々を対象にするので，必要な単語，文を適切に繰り返すことが理解を助ける。このため，もともと繰り返しを含む文章構成を考えることが必要である。

「やさしい日本語」を考えていると，内容は異なるが，同じような表現に陥ることがある。

例：「パスポートを持っている人は，…」

「パスポートを持っていない人は…」

「る」か「ない」かで意味は反対になる。

ほかのことばが同じであるために，このわずかな変異が大きな意味を持つ。

このような場合には，文全体の変異度を高める必要がある。

「パスポートがある人は」「パスポートをなくしたり，今持っていない人は」などと変異度を高めることで理解を促進できる。

5. 音声による伝え方

本稿では「やさしい日本語」の音声について取り上げる。通常の情報伝達文の読み上げの典型例としてNHKの午後7時のニュースを対照として取り上げる。

「やさしい日本語」の音声は，次のような特徴を持たせることでより効果的な伝達となりうる。

1. ことばのかたまりを作って，読み上げる。
2. イントネーションは普通の話し方と同じパターンにする。
3. 速度は通常の話しことばより遅くする。
4. 難しいと思われることばは解説を付ける。

1の「ことばのかたまり」というのは，修飾節を含んだ名詞（句）のことであるが，文法的な語の区切りと違うのは，「最後の助詞を含む」ことである。

「近くにいる人」ではなく「近くにいる人は」までをひとかたまりとしてとらえる。

このようにしてできた，「かたまり」は一息で読まなければならない。

耳から理解する人は，話者の一息で伝えられる音声が一つのまとまった意味を持つと理解するからである。

一息で読めない「かたまり」は分解して別の句にする必要がある。

ゆっくり読む場合，この一息はおよそ20拍までにしないと読みが苦しくなる。

松田が示したように読み上げ者に対して息継ぎを明示するのも一つの方法である[2)]。松田は白い□で息を切って間を作る個所を指示し，黒い■で息を吸うところを示している。

例：病気□病院について□英語や□中国語など□外国語で□話したいとき■国際病院に□電話してください■

この例では，初めの文は38拍あり，プロのアナウンサーが読んで一息が続くぎりぎりの長さである。

「病気□病院についてです。■英語や□中国語など□外国語で□話したいときは■国際病院に□電話してください。■」に変えれば最長でも25拍にすることができる。

2のイントネーションは，図1から3に示した模式図で理解してもらいたい。

図1は通常の話しことばのイントネーションである。「窓から外を見てください」という文章は，文の終わりに近づくに従ってイントネーションが下がる（音程と音量が低くなる）ことが普通である。

文をていねいにゆっくり読もうとすると，「外」「見て」などはその頭の音がやや持ち上がる傾向がある。

これを，区切ってゆっくりと読もうとすると，**図2**のようなそれぞれの句の初めが一定で，句の中だけで同じようなイントネーション下降が見られる「さお竹屋イントネーション」とでも言うべき単調なイントネーションに陥りがちである。

このイントネーションは句単独のイントネーションでは自然だと感じられるが，文としてはどこで終わるのか，先はどこまで続くのかが予測できず，文章としての理解が妨げられる。

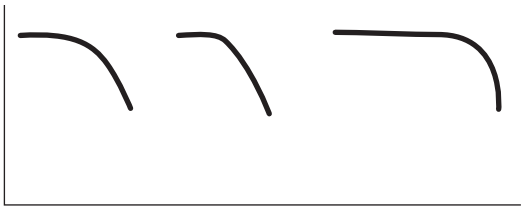
「やさしい日本語」ではあくまで通常のイントネーションを保存し，文の終わりはきち

んと下げ，間のあとは前の句の出だしの音よりは下がる，**図3**のようなイントネーションを形成しなければならない。

図1

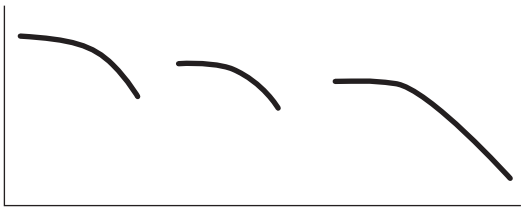
まどからそとをみてください

図2



まどから　そとを　みてください

図3



まどから　そとを　みてください

図3のようなイントネーションの音声であれば，日本語母語者でも区切りの多さや読み上げ速度の低下があっても違和感が軽減される。

このイントネーション形成にも欠点があり，「自然に」聞こえるのであるが，何が重要な単語であるかは，通常の音声よりも理解しにくくなる。いわゆる「右の耳から入って左の耳に抜けてしまう」状態になりやすい。

対策としては，重要な語，伝えたい内容のキーワードは1文1つ程度強調して伝えることが必要になる。

その部分はややイントネーションを上げることで，変化が生まれ，印象度が高くなる。

「やさしい日本語」の文章では名詞と動詞が重要な役割を果たすので，その部分だけが聞こえても全体の文意を推理できるような文章が望ましいと言える。

そのようなキーワードを探し，強調対象とするのである。強調の方法としては，「声を大きくする」「音程（イントネーション）を少し高くする」「ゆっくり読む」というテクニックがある。

弘前市にあるミニFM局の「アップルウェーブ」では市の広報などをこの「やさしい日本語」で伝える試みをしているが，担当するスタッフによれば「普通の文章を読むより呼吸量が多く，ていねいに読まなければならないので疲れやすい」「どうしても早く読んでしまいがちである」ということである。

たしかに，呼気量は文章によりまちまちになり，楽なアナウンスメントではない。彼女らの放送を聞くと，一部，「さお竹屋イントネーション」に近くなっていることもある。キーワードに注意して読むようにすると，句ごとのイントネーションに変化が生じ，より自然な口調に聞こえる。

一般の日本語母語者にも抵抗なく聞こえるためには，句末の音の処理にもくふうが必要になる。「やさしい日本語」で読もうとすると句の終わりの音が長音化する傾向が出る。いわゆる「全共闘口調」あるいは「語尾のび口調」になったり，「語尾上げ」になったりすることがある。

短い文や句であっても，吸気を使い尽くす訓練をしないと句末ののびは防ぎにくい。

「読みの速さ」については，NHKの午後7時のニュースが平均すると毎分420～460拍

であるのに対して，「やさしい日本語」では毎分180～300拍程度を考えている。

これは前述したように普通の日本語の発話に比べ，語や句で切れ目（間）を数多く入れているために，「平均速度」が遅くなることと，一つずつの音をていねいに発音しているために「瞬間速度」も低下しているためである。

「やさしい日本語」が目指している外国語母語者にわかりやすい速度は，その人の日本語能力，特に会話能力に影響されるのだが，これまでに3回行った留学生を対象にしたテストの結果を考えると，日本語能力試験3，4級者を対象にした場合は，200拍前後が，さらにもう少し上の会話能力があれば260拍前後が適切ではないかと考えられる。

速度も日本語母語者にとっては違和感を生む原因でもあるので，今後試していかなければならない課題の一つである。非常時に使われる防災スピーカーは，地形の影響や隣接スピーカーの干渉もあり，間を十分に取り，比較的ゆっくりしゃべっているが，平均速度では240拍／分程度であり，瞬間速度では300拍／分を超えることが多い。日本語母語者への適合を考えるのに一つの参考になる数値ではないだろうか。

6. やさしい日本語の効用

「やさしい日本語」の効用として，別の側面もあることを知らされた。それは，留学生など外国語話者に，母国語での説明文を配布する必要があり，その原文を，「やさしい日本語」で作ったのである。すると，翻訳する際にも，原文がやさしい日本語のほうが翻訳時間を短縮でき，翻訳の手間が省けたのである。また，多言語化したときの内容情報のばらつきが押さえられることが見られた。

災害時にボランティアとして協力する外国語話者が情報の元とするのは日本語情報であるので，翻訳ボランティアに提供する日本語文章を「やさしい日本語」で作成することで，翻訳時間短縮や内容の均一性を望むことができると思われる。

外来語が多く，わかりにくいとされる自治体の広報文にも適用すれば，よりわかりやすく，訴える力が大きい文章が作れるのではないだろうか。

7. 今後の応用と展開

以上述べたように，「やさしい日本語」は災害時だけでない活用の道がありそうである。官公庁の広報文，防災スピーカー，広報車でのアナウンスなどが考えられる。

また放送では，「やさしい日本語」を使うことによる情報量の低下という最大のデメリットがあることと，人命にかかわることについては実験できないということから採用は難しいと考えられるが，発災時の心身ストレスによる理解力の一時的な低下に対する対策として，極限られた時間での利用が考えられるのではないだろうか。

放送以外の活用については，現状では有効な指導者は少ないが，マニュアルはあるので（注1参照）さらなる整備が望まれる。

（しばた　みのる）

注／引用文献

1） http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/ej-top.html を参照

2） 科研費研究成果物『災害時に使う外国人のための日本語文案』松田陽子・前田理佳子・水野義道・佐藤和之ほか 1999